

クロチアニジン (案)

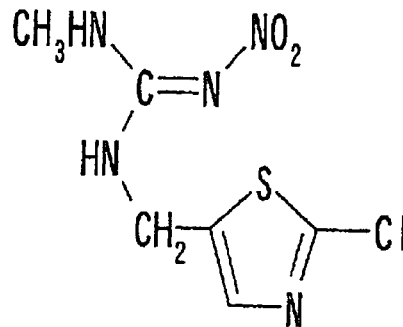
1. 品目名：クロチアニジン (clothianidin)

2. 用途：殺虫剤

ネオニコチノイド系殺虫剤である。作用機序は、主にニコチン性アセチルコリン受容体アゴニスト作用によるものと考えられる。

3. 化学名：(E)-1-(2-クロロ-1,3-チアゾール-5-イルメチル)-3-メチル-2-ニトログアニジン

4. 構造式及び物性



分子式	$C_6H_8ClN_5O_2S$
分子量	249.68
水溶解度	0.327 g/L (20°C)
分配係数	logPow = 0.7 (25°C)

(メーカー提出資料より)

5. 適用病害虫の範囲及び使用方法

本薬の適用病害虫の範囲及び使用法は以下のとおり。

なお、作物名となっているものについては今回適用拡大申請がなされたものを示している。

(1) 16.0%クロチアニジン水溶剤

作物名	適用病害虫名	希釈倍率	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用法	クロチアニジンを含む農薬の総使用回数
稲	ウカ類 ツマグロヨコバイ カメシ類 イトヨトウムシ	4000倍	60～150 L/10a	収穫14日前まで	3回以内	散布	4回以内 (育苗箱散布は1回以内、 本田では3回以内)
	ウカ類 カメシ類 イトヨトウムシ	1000倍	25L/10a				
稲 (箱育苗)	ウカ類 ツマグロヨコバイ アオヒコヤカ	200倍	育苗箱 (30×60×3cm、 使用土壌約5L)	移植3日前～ 移植当日	1回	育苗箱の上から均一に散布する	
	イトヨトウムシ イネズヅウムシ	200～ 400倍	1箱当たり 500mL				
れんこん	クワイレアブラムシ	2000～ 4000倍	100～300 L/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布	3回以内
きゅうり	ミキイロアザミウマ アブラムシ類 コジラミ類			収穫前日まで			4回以内 (育苗期の株元処理及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布は3回以内)
	アスパラガス			アブラムシ類 ネギアザミウマ			3回以内
すいか	アブラムシ類			4000倍			
	ミキイロアザミウマ ウリハムシ	2000倍					

(1) 16.0%クロチアニジン水溶剤 (つづき)

作物名	適用 病害虫名	希釈倍 率	使用液量	使用時期	本剤の 使用回 数	使用方 法	クロチアニジ ンを含む農薬 の総使用回数
メロン	アブラムシ類	4000倍	100～300 L/10a	収穫前日まで	3回以内	散布	4回以内 (育苗期の株 元処理及び定 植時の土壌混 和は合計1回 以内、散布は3 回以内)
	コナジラミ類 ミナキイロアザミウマ	2000～ 4000倍					
	トマトハモグリバエ	2000倍					
ミナキイロアザミウマ ハモグリバエ類							
なす	アブラムシ類 マメハモグリバエ コナジラミ類	2000～ 4000倍					
	アブラムシ類 コナジラミ類	2000倍					
トマト ミニトマト	ハモグリバエ類						
	ピーマン	アブラムシ類					
コナジラミ類		2000～ 4000倍					
ミナキイロアザミウマ		2000倍					
にら	ネギアザミウマ		3回以内				
ブロッコリー	アブラムシ類	3回以内					
だいこん	アブラムシ類	2000～ 4000倍	収穫7日前まで	2回以内	3回以内 (は種時の土壌 混和は1回以内、 は種後は2回以内)		
レタス	ハモグリバエ	2000倍	収穫3日前まで		3回以内 (育苗期の株元 処理は1回以内、 散布は2回以内)		
非結球レタス	アブラムシ類	2000～ 4000倍				2回以内	
	ハモグリバエ	2000倍					

(1) 16.0%クロチアニジン水溶剤 (つづき)

作物名	適用 病害虫名	希釈倍 率	使用液量	使用時期	本剤の 使用回 数	使用方 法	クロチアニジ ンを含む農薬 の総使用回数
キャベツ	アブラムシ類	2000～ 4000倍	100～300 L/10a	収穫3日前まで	2回以内	散布	3回以内 (は種時の散 布、育苗期の株 元処理及び定 植時の土壌混 和は合計1回 以内、散布は2 回以内)
	アオムシ	2000倍					
ねぎ	ネギアザミウマ ネギハモグリバエ	2000～ 4000倍			4回以内		4回以内
ばれいしょ	アブラムシ類	1000倍 4000倍	25L/10a	収穫7日前まで	3回以内		4回以内 (植付時の土壌 混和は1回以内、 植付後は3回以 内)
	テントウムシダマシ類	2000～ 4000倍	100～300 L/10a				
てんさい	テンサイビハムシ テンサイグリアバエ カメノコハムシ	100～ 200倍	1L/ペーパー ポット1冊 (3L/m ²)	定植前	1回	苗床 灌注	1回
えだまめ	アブラムシ類	2000～ 4000倍	100～300 L/10a	収穫3日前まで	3回以内	散布	3回以内
だいず	カメムシ類	2000倍		収穫7日前まで			
	アブラムシ類 マメシクイガ	2000～ 4000倍					
	アタスジヒメハムシ カメムシ類	2000～ 4000倍					
りんご	カメムシ類	4000倍	200～700 L/10a	収穫前日まで			
	キンモンホリガ キンモンハモグリガ シクイムシ類 アブラムシ類 クワコナカイガラムシ リンゴワタムシ	2000～ 4000倍					

(1) 16.0%クロチアニジン水溶剤 (つづき)

作物名	適用 病害虫名	希釈倍 率	使用液量	使用時期	本剤の 使用回 数	使用方 法	クロチアニジ ンを含む農薬 の総使用回数
なし	シクイムシ類 アブラムシ類 クロコカイガラムシ カメムシ類	2000～ 4000倍	200～700 L/10a	収穫前日まで	3回以内	散布	3回以内
もも	アブラムシ類 モモハモグリガ シクイムシ類 カメムシ類 コガネムシ類	2000倍		収穫7日前まで			
ネクタリン	アブラムシ類 モモハモグリガ シクイムシ類 カメムシ類 コガネムシ類	2000～ 4000倍		収穫3日前まで			
おうとう	オウトウシヨウジヨウハエ カメムシ類	2000倍		収穫前日まで	2回以内		2回以内
うめ	カメムシ類 アブラムシ類	2000～ 4000倍		収穫7日前まで	3回以内		3回以内
ぶどう	コカカイガラムシ類 チャキイロアザミマ フタテンヒメヨコバイ			収穫14日前まで			
マンゴー	アザミマ類 コカカイガラムシ類			収穫7日前まで			
いちじく	アザミマ類			収穫3日前まで			
すもも あんず	アブラムシ類	4000倍		100～300 L/10a	収穫7日前まで		
豆類 (種実、た だし、だい ず、らっか せいを除 く)	アブラムシ類	4000倍					

(1) 16.0%クロチアニジン水溶剤 (つづき)

作物名	適用 病害虫名	希釈倍 率	使用液量	使用時期	本剤の 使用回 数	使用方 法	クロチアニジ ンを含む農薬 の総使用回数
かんきつ (みかんを 除く)	アブラムシ類 シロアゲハ類 アザミウマ類 ケンキスイ類 コオハナムグリ ツノウムシ コナカイガラムシ類 ゴマダラカミキリ カメムシ類 アゲハ類 アカマルカイガラムシ <u>ミカンキンジラミ</u>	2000～ 4000 倍	200～700 L/10a	収穫 7 日前まで	3 回以内	散布	3 回以内
	<u>ミカンハエ</u>	2000 倍					
かき	カキノヒメヨコバイ	4000 倍	200～400 L/10a	摘採 7 日前まで	1 回	散布	1 回
	チャノキイロアザミウマ カキクダアザミウマ アジコナカイガラムシ カキノハナムシガ カメムシ類	2000～ 4000 倍					
茶	チャノキイロアザミウマ チャノミドリヒメヨコバイ チャノホソガ	2000～ 4000 倍	100～300 L/10a	収穫前日まで	3 回以内	散布	3 回以内
	コミカンアブラムシ	4000 倍					
<u>にがらじ</u>	ミナミキイロアザミウマ	2000 ～ 4000 倍	100～300 L/10a	収穫前日まで	3 回以内	散布	3 回以内

(1) 16.0%クロチアニジン水溶剤 (つづき)

作物名	適用 病害虫名	希釈倍 率	使用液量	使用時期	本剤の 使用回 数	使用方 法	クロチアニジ ンを含む農薬 の総使用回数
みかん	ミカンモグリガ	20 倍	100mL/樹	収穫 150 日 前まで	1 回	樹幹 散布	4 回以内 (樹幹散布 は 1 回以内、 植付後は 3 回 以内)
	アブラムシ類 ミカンモグリガ アザミマ類 ケシスイ類 コアオナムグリ ツノウムシ コカイガラムシ類 ゴマダラカミキリ カメムシ類 アゲハ類 アカマルカイガラムシ	2000～ 4000 倍	200～700 L/10a	収穫 7 日前まで	3 回以内	散布	
	ミカンキンゾウ ミカンハエ	2000 倍					
	オクラ チンゲンサイ みずな	アブラムシ類	2000～ 4000 倍	100～300 L/10a			

(2) 1.0%クロチアニジン 1 キロ粒剤

作物名	適用 病害虫名	使用量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	クロチアニジ ンを含む農薬 の総使用回数
稲	ウンカ類 ツマグロヨコバイ	1kg/10a	収穫 14 日前まで	3 回以内	散布	4 回以内 (但し本田 期は 3 回以 内)

(3) 0.50%クロチアニジン粒剤

作物名	適用 病害虫名	使用量	使用時期	本剤の 使用回 数	使用方法	クロチアニジ ンを含む農薬 の総使用回数	
稲	ウカ類 ツマグロヨコバイ	3kg/10a	収穫 14 日前まで	3 回以内	散布	4 回以内 (育苗箱散布は 1 回以内、本田では 3 回以内)	
	カメシ類	3~4kg/10a					
稲 (箱育苗)	イトヨモミシ イトズヅウムシ	育苗箱 (30×60×3 cm、 使用土壌約 5L) 1 箱当り 50g	移植 3 日前～ 移植当日	1 回	育苗箱の 苗の上から均一に 散布する	4 回以内 (育苗期の株元 処理及び定植時 の土壌混和は合 計 1 回以内、散布 は 3 回以内)	
きゅうり	コジラミ類 アブラムシ類	1g/株	育苗期後半		株元処理		
	コジラミ類 アブラムシ類	1~2g/株	定植時		植穴処理 土壌混和		
	シキイロアザミウマ	2g/株					
	アブラムシ類 シキイロアザミウマ	1~2g/株					
すいか	アブラムシ類 シキイロアザミウマ	1~2g/株	定植時		株元処理		
メロン	アブラムシ類 コジラミ類	1g/株	育苗期後半		植穴処理 土壌混和		4 回以内 (育苗期の株元 処理及び定植時 の土壌混和は合 計 1 回以内、散布 は 3 回以内)
	アブラムシ類 シキイロアザミウマ トマトハモグリバエ	1~2g/株	定植時				
	シキイロアザミウマ トマトハモグリバエ	2g/株					
	アブラムシ類	1g/株					
なす	アブラムシ類 マメハモグリバエ コジラミ類	1g/株	育苗期後半	株元処理			
	アブラムシ類		定植時	植穴処理 土壌混和			
	コジラミ類						
トマト ミニトマト	アブラムシ類 コジラミ類	1~2g/株	鉢上時	株元処理 植穴処理 土壌混和	4 回以内 (鉢上時の株元処 理及び定植時の 土壌混和は合計 1 回以内、散布は 3 回以内)		
	アブラムシ類 マメハモグリバエ トマトハモグリバエ		2g/株			定植時	
	アブラムシ類	1~2g/株					
	コジラミ類		2g/株				

(3) 0.50%クロチアニジン粒剤 (つづき)

作物名	適用 病害虫名	使用量	使用時期	本剤の 使用回 数	使用方法	クロチアニジ ンを含む農薬 の総使用回数
いちご	アブラムシ類	1g/株	定植時	1回	植穴処理 土壌混和	1回
だいこん		3~6kg/10a	は種時		播溝処理 土壌混和	3回以内 (は種時の土壌 混和は1回以内、 は種後は2回以 内)
レタス		0.5g/株	育苗期後半		株元処理	3回以内 (育苗期の株元 処理は1回以内、 散布は2回以内)
ねぎ わけぎ あさつき	ネギアザミマ ネギハモグリバエ	3~6kg/10a	収穫3日前まで	4回以内	株元散布	4回以内
キャベツ	アブラムシ類 ハマダラカメカ	0.25g/株	は種時	1回	覆土後セル 成育苗トレ イの上から 散布する	3回以内 (は種時の散布、 育苗期の株元処 理及び定植時の 土壌混和は合計1 回以内、散布は2 回以内)
	ネキリムシ類 コガ アオムシ アブラムシ類	0.5g/株	育苗期後半		株元処理	
	アブラムシ類 コガ アオムシ	1g/株	定植時		植穴処理 土壌混和	
	コガ アオムシ	2g/株				
れんこん	クワイヒレアブラムシ		収穫7日前まで	3回以内	散布	3回以内
ばれいしょ	アブラムシ類	6kg/10a	植付時	1回	植溝処理 土壌混和	4回以内 (植付時の土壌 混和は1回以内、 植付後は3回以 内)
かんしょ	コガネ類				作条処理 土壌混和	1回

(3) 0.50%クロチアニジン粒剤 (つづき)

作物名	適用 病害虫名	使用量	使用時期	本剤の 使用回 数	使用方法	クロチアニジ ンを含む農薬 の総使用回数
ピーマン	アブラムシ類	1g/株	育苗期後半	1回	株元処理	3回以内 (育苗期の株元 処理及び定植時 の土壌混和は合 計1回以内、散布 は2回以内)
			定植時		植穴処理 土壌混和	

(4) 0.15%クロチアニジン粒剤 DL

作物名	適用 病害虫名	使用量	使用時期	本剤の 使用回 数	使用方法	クロチアニジ ンを含む農薬 の総使用回数
稲	ウカ類 ツマグロヨコバイ カメムシ類	3~4kg/10a	収穫14日前まで	3回以内	散布	4回以内 (育苗箱散布は1 回以内、本田では 3回以内)
	イナゴ類	4kg/10a				
	イネトヨイムシ フタホトコヤガ	3kg/10a				
だいず	アブラムシ類 カメムシ類	4kg/10a	収穫7日前まで			3回以内

(5) 1.5%クロチアニジン箱粒剤

作物名	適用 病害虫名	使用量	使用時期	本剤の 使用回 数	使用方法	クロチアニジ ンを含む農薬 の総使用回数
稲 (箱育苗)	ウカ類 ツマグロヨコバイ イネミスジウシ イネトヨイムシ ニカメイチュウ フタホトコヤガ イネヒメモグリバエ	育苗箱 (30×60×3 cm、 使用土壌約5L) 1箱当り50g	移植3日前~ 移植当日	1回	育苗箱の 上から均 一に散布 する。	4回以内 (育苗箱散布は1 回以内、本田では 3回以内)

(6) 0.50%クロチアニジンH粉剤DL

作物名	適用 病害虫名	使用量	使用時期	本剤の 使用回 数	使用方法	クロチアニジ ンを含む農薬 の総使用回数
稲	カメシ類 ウカ類 ツマグロヨコバイ イコ類 イネトシ ニカメテウ フタヒコヤガ	3~4kg/10a	収穫14日前まで	3回以内	散布	4回以内 (育苗箱散布は1 回以内、本田では 3回以内)
	イネトオシ	3kg/10a				
だいで	アブラシ類 カメシ類 フタシヒメシ	3~4kg/10a	収穫7日前まで			3回以内

(7) 20.0%クロチアニジン水和剤(フロアブル)

作物名	適用 病害虫名	希釈倍率	使用液量	使用時期	本剤の 使用回 数	使用方 法	クロチアニジ ンを含む農薬 の総使用回数
稲	イコ類 ウカ類 ツマグロヨコバイ カメシ類	5000倍	60~150 L/10a	収穫14日前まで	3回以内	散布	4回以内 (育苗箱散布 は1回以内、 本田では3回 以内)
	ウカ類 ツマグロヨコバイ カメシ類	90倍	3L/10a			空中 散布	
	ウカ類 カメシ類	24倍	800mL/10a			無人ヘリ コプター による 散布	
だいで	アブラシ類 カメシ類 マシクガ	2500倍					3回以内
ばれいしよ	アブラシ類	5000倍	100~300 L/10a	収穫7日前まで		散布	4回以内 (植付時の土壌 混和は1回以内、 植付後では3回 以内)

6. 作物残留試験結果

(1) 分析の概要

① 分析対象の化合物

- ・ クロチアニジン

② 分析法の概要

試料をアセトンで抽出し、CHEM ELUT™ カラム、Sep-Pak®アルミナ(N)及びシリカカートリッジで精製した後、高速液体クロマトグラフにより定量する。

検出限界 0.002~0.05ppm。

(2) 作物残留試験結果

① 稲

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、及び16.0%水溶剤の4,000倍希釈液を計3回散布（150L/10a）したところ、散布後13^{注2)}~28日の最大残留量^{注1)}は0.134, 0.104 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、及び1.0%1キロ粒剤を計3回散布（1kg/10a）したところ、散布後13^{注2)}~28日の最大残留量は<0.004, 0.026 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、及び0.15%粉剤DLを計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後13^{注2)}~28日の最大残留量は0.048, 0.023 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、及び0.5%粒剤を計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後14~22日の最大残留量は0.02, <0.01 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに0.5%粉剤DLを計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後14~28日の最大残留量は0.07, 0.09 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに16.0%水溶剤の4,000倍希釈液を計3回散布（150L/10a）したところ、散布後14~28日の最大残留量は0.14, 0.12 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに0.5%粒剤を計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後14~28日の最大残留量は0.01, 0.02 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに20.0%フロアブルの5,000倍希釈液を計3回散布（150L/10a）したところ、散布後14～28日の最大残留量は0.12, 0.13 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(3例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに20.0%フロアブルの24倍希釈液を計3又は4回RCH散布（0.8L/10a）したところ、散布後14～28日の最大残留量は0.04, 0.16, 0.16 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、及び16.0%水溶剤の4,000倍希釈液を計3回散布（150L/10a）したところ、散布後13^{注2)}～28日の最大残留量は0.11, 0.132 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、及び1.0%1キロ粒剤を計3回散布（1kg/10a）したところ、散布後13^{注2)}～28日の最大残留量は0.118, 0.176 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、及び0.15%粉剤DLを計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後13^{注2)}～28日の最大残留量は0.12, 0.142 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、及び0.5%粒剤を計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後14～22日の最大残留量は0.72, 0.26 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに0.5%粉剤DLを計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後14～28日の最大残留量は0.28, 2.75 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに16.0%水溶剤の4,000倍希釈液を計3回散布（150L/10a）したところ、散布後14～28日の最大残留量は0.18, 0.78 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希釈液を0.5L/箱及び2.5%箱粒剤を50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに0.5%粒剤を計3回散布（4kg/10a）したところ、散布後14～28日の最大残留量は0.17, 2.16 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の200倍希

积液を 0.5L/箱及び 2.5%箱粒剤を 50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに 20.0%フロアブルの 5,000 倍希积液を計 3 回散布（150L/10a）したところ、散布後 14～28 日の最大残留量は 0.12, 1.02 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験（3 例）において、16.0%水溶剤の 200 倍希积液を 0.5L/箱及び 2.5%箱粒剤を 50g/箱（移植当日育苗施用）、並びに 20.0%フロアブルの 24 倍希积液を計 3 又は 4 回 RCH 散布（0.8L/10a）したところ、散布後 14～28 日の最大残留量は 0.81, 2.57, 2.28 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

②だいず

だいず（乾燥子実）を用いた作物残留試験（2 例）において、0.5%粒剤を 6 kg/10a（播種時播溝処理土壌混和）、及び 16.0%水溶剤の 2,000 倍希积液を計 3 回散布（150, 200L/10a）したところ、散布後 7～21 日の最大残留量は 0.01, <0.01 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

だいず（乾燥子実）を用いた作物残留試験（2 例）において、0.5%粒剤を 6 kg/10a（播種時播溝処理土壌混和）、及び 0.5%H 粉剤 DL を計 4 回又は 3 回散布（4 kg/10a）したところ、散布後 7～21 日の最大残留量は <0.01, <0.01^{註3)} ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

だいず（乾燥子実）を用いた作物残留試験（2 例）において、0.5%粒剤を 6 kg/10a（播種時播溝処理土壌混和）、及び 20.0%フロアブルの 2,500 倍希积液を計 3 回散布（200, 250L/10a）したところ、散布後 7～21 日の最大残留量は <0.01, <0.01 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

③ばれいしょ

ばれいしょ（塊茎）を用いた作物残留試験（2 例）において、0.5%粒剤を 6kg/10a（播種前播種溝処理土壌混和）、及び 16.0%水溶剤の 2,000 倍希积液を計 3 回散布（150L/10a）したところ、散布後 7～21 日の最大残留量は 0.002, 0.016 ppm であった。

ばれいしょ（塊茎）を用いた作物残留試験（2 例）において、0.5%粒剤を 6kg/10a（植付時植溝処理土壌混和）、及び 20.0%フロアブルの 2,500 倍希积液を計 3 回散布（200, 250L/10a）したところ、散布後 7～21 日の最大残留量は <0.01, 0.01 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

ばれいしょ（塊茎）を用いた作物残留試験（2 例）において、0.5%粒剤を 6kg/10a（植付時植溝処理土壌混和）、及び 16.0%水溶剤の 1,000 倍希积液を計 3 回散布（25L/10a）したところ、散布後 7～21 日の最大残留量は 0.03, <0.01 ppm であった。

④かんしょ

かんしょ(塊根)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を9kg/10a、定植時作条処理土壌混和として1回用いたところ、散布後104~116日の最大残留量は<0.01, <0.01 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

⑤てんさい

てんさい(根部)を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の100倍希釈液を計1回定植時苗床灌注(1L/冊)したところ、散布後160~175日の最大残留量は<0.01, <0.01 ppmであった。

てんさい(根部)を用いた作物残留試験(2例)において、20.0%フロアブルの原液を489mL/100,000ペレット種子(種子コーティング)、16.0%水溶剤の100倍希釈液を計1回定植時苗床灌注(1L/冊)及び2000倍希釈液を計3回散布(200, 500L/10a)したところ、散布後14~30日の最大残留量は<0.01, 0.02 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

⑥だいこん

だいこん(根部)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を6kg/10a(播種前播種溝処理土壌混和)、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計2回散布(150, 200L/10a)したところ、散布後7~14日の最大残留量は0.016, 0.014 ppmであった。

だいこん(葉部)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を6kg/10a(播種前播種溝処理土壌混和)、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計2回散布(150, 200L/10a)したところ、散布後7~14日の最大残留量は0.84, 2.26 ppmであった。

だいこん(つまみ菜)を用いた作物残留試験(1例)において、0.5%粒剤を6kg/10a(播種前播種溝処理土壌混和)したところ、散布後10日の最大残留量は0.48 ppmであった。

だいこん(間引き菜)を用いた作物残留試験(1例)において、0.5%粒剤を6kg/10a(播種前播種溝処理土壌混和)したところ、散布後22日の最大残留量は0.14 ppmであった。

⑦キャベツ

キャベツ(葉球)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を2g/株(定植時植穴処理土壌混和)、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計2回散布(200, 300L/10a)したところ、散布後3~14日の最大残留量は0.18, 0.16 ppmであった。

⑧レタス

レタス（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を2g/株（定植時植穴処理土壌混和）、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計2回散布（200, 300L/10a）したところ、散布後3～14日の最大残留量は0.58, 1.33 ppmであった。ただし、この試験は適用範囲内で行われていない。

⑨ねぎ

ねぎ（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を6kg/10a、定植時植溝処理土壌混和として1回、株元散布として4回散布したところ、散布後3～14日の最大残留量は0.05, 0.14 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

ねぎ（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を6kg/10a（播種前播種溝処理土壌混和）、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計4回散布（200, 150L/10a）したところ、散布後3～14日の最大残留量は0.09, 0.13 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

⑩トマト

トマト（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を2g/株（定植時植穴処理土壌混和）、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（250 L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.23, 0.12 ppmであった。

⑪ピーマン

ピーマン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を2g/株（定植時植穴処理土壌混和）、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計2回散布（200, 150～200L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量は1.21, 1.02 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

⑫なす

なす（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を2g/株（定植時植穴処理土壌混和）、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（162.5～200, 200L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.290, 0.379 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

⑬きゅうり

きゅうり（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を2g/株（定植時植穴処理土壌混和）、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（300, 200L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.695, 0.224 ppmであった。

⑭メロン

メロン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を2g/株（定植時植穴処理土壌混和）、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（250, 300L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.038, 0.012 ppmであった。

⑮すいか

すいか（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を2g/株（定植時植穴処理土壌混和）、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（250, 300L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.022, 0.011 ppmであった。

⑯温州みかん

温州みかん（果肉）を用いた作物残留試験（2例）において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（400L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.246, 0.086 ppmであった。

温州みかん（果皮）を用いた作物残留試験（2例）において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（400L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は3.24, 1.09 ppmであった。

温州みかん（果肉）を用いた作物残留試験（2例）において、16.0%水溶剤の20倍希釈液を1回樹幹散布（22.2, 13.3L/10a）及び2000倍希釈液を計3回散布（666, 800L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.02, 0.08 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

温州みかん（果皮）を用いた作物残留試験（2例）において、16.0%水溶剤の20倍希釈液を1回樹幹散布（22.2, 13.3L/10a）及び2000倍希釈液を計3回散布（666, 800L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.74, 2.96 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

⑰夏みかん

夏みかん（果肉）を用いた作物残留試験（2例）において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（500L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.023, 0.292 ppmであった。

夏みかん（果皮）を用いた作物残留試験（2例）において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（500L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.362, 2.18 ppmであった。

夏みかん（果実）^{注4)}を用いた作物残留試験（2例）において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（500L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.118, 0.726 ppmであった。

⑱すだち(果実)

すだち(果実)を用いた作物残留試験(1例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(500L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は0.297 ppmであった。

⑲かぼす(果実)

かぼす(果実)を用いた作物残留試験(1例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(500L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は0.204 ppmであった。

⑳りんご

りんご(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(500L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は0.155, 0.042 ppmであった。

りんご(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(350, 400L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は0.15, 0.06 ppmであった。

㉑なし

なし(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(300, 500L/10a)したところ、散布後1~14日の最大残留量は0.39, 0.18 ppmであった。

㉒もも

もも(果肉)を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(400L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は0.124, 0.084 ppmであった。

もも(果皮)を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(400L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は1.00, 2.04 ppmであった。

㉓うめ

うめ(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(700, 500~800L/10a)したところ、散布後7~28日の最大残留量は0.97, 1.12 ppmであった。なお、500~800L/10a散布された1例については、適用範囲内で試験が行われていない。

㉔おうとう

おうとう(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計2回散布(625, 500L/10a)したところ、散布後1~14日の最大

残留量は 1.08, 1.96 ppm であった。

㊸ぶどう(果実)

ぶどう(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(300L/10a)したところ、散布後14～56日の最大残留量は0.506(大粒種), 1.43(小粒種) ppm であった。

㊹かき

かき(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(400, 500L/10a)したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.11, 0.14 ppm であった。

㊺茶

茶(荒茶)を用いた作物残留試験(3例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計1回散布(400L/10a)したところ、散布後7～21日の最大残留量は37.6, 2.42, 9.92 ppm であった。

茶(浸出液)を用いた作物残留試験(3例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計1回散布(400L/10a)したところ、散布後7～21日の最大残留量は36.4, 2.27, 8.70 ppm であった。

㊻いちご

いちご(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を2g/株、定植時植穴処理土壌混和として1回用いたところ、混和後62～104日の最大残留量は0.22, 0.06 ppm であった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

㊼あんず

あんず(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(556, 500L/10a)したところ、散布後3～14日の最大残留量は0.72, 1.06 ppm であった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

㊽れんこん

れんこん(根)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を12kg/10a定植時植穴処理土壌混和として1回、散布として計3回用いたところ、散布後7～21日の最大残留量は<0.01, <0.01 ppm であった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

れんこん(根茎)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を12kg/10a定植時植穴処理土壌混和として1回、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(300, 200L/10a)したところ、散布後7～21日の最大残留量は<0.01, <0.01

ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

① **いんげんまめ**

いんげんまめ（乾燥子実）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を6kg/10a（播種時播溝処理土壌混和）、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（150, 244L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.01, 0.02 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

② **あずき**

あずき（乾燥子実）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を6kg/10a（播種時播溝処理土壌混和）、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（300, 150L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.09, 0.03 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

③ **ブロッコリー**

ブロッコリー（花蕾）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を2g/株（定植時植穴処理土壌混和）、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（200L/10a）したところ、散布後3～21日の最大残留量は0.33, 0.07 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

④ **アスパラガス**

アスパラガス（若茎）を用いた作物残留試験（2例）において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布（300L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.10, 0.24 ppmであった。

⑤ **リーフレタス**

リーフレタス（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を2g/株（定植時植穴処理土壌混和）、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計2回散布（200～230, 238L/10a）したところ、散布後3～14日の最大残留量は7.96, 6.67 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

⑥ **サラダ菜**

サラダ菜（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を2g/株（定植時植穴処理土壌混和）、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計2回散布（150～200, 195L/10a）したところ、散布後3～14日の最大残留量は9.99, 4.41 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

⑦ **えだまめ**

えだまめ（さや）を用いた作物残留試験（2例）において、0.5%粒剤を6kg/10a（定植時播溝処理土壌混和）、及び16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布

(200, 300L/10a) したところ、散布後3～14日の最大残留量は0.69, 0.26 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

③⑧にら

にら（茎葉）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(200L/10a)したところ、散布後3～14日の最大残留量は6.18, 1.42 ppmであった。

③⑨ネクタリン

ネクタリン(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(400, 500L/10a)したところ、散布後3～14日の最大残留量は0.64, 0.58 ppmであった。

④⑩すもも

すもも（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(500, 400L/10a)したところ、散布後3～14日の最大残留量は0.10, 0.04 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

④⑪ミニトマト

ミニトマト（果実）を用いた作物残留試験(1例)において、0.5%粒剤を2g/株（定植時植溝処理土壌混和）、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(300～400L/10a)したところ、散布後1～14日の最大残留量は0.66 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

ミニトマト（果実）を用いた作物残留試験(1例)において、0.5%粒剤を2g/株（定植時植溝処理土壌混和）、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(300L/10a)したところ、散布後1～14日の最大残留量は0.90 ppmであった。

④⑫にがうり

にがうり（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を2g/株（定植時植溝処理土壌混和）、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(250, 180L/10a)したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.28, 0.16 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

④⑬チンゲンサイ

チンゲンサイ（茎葉）を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を2g/株（定植時植溝処理土壌混和）、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(200, 300L/10a)したところ、散布後14日の最大残留量は0.16, 0.85 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

④④ みずな

みずな(茎葉)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を6kg/10a(播種時播溝処理土壌混和)、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(40~150, 227.8L/10a)したところ、散布後7~14日の最大残留量は1.07, 2.46 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

④⑤ おくら

おくら(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を6kg/10a(播種時播溝処理土壌混和)、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(200, 100~150L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は0.36, 0.30 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

④⑥ マンゴー

マンゴー(果実)を用いた作物残留試験(1例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(320L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は0.06 ppmであった。

マンゴー(果実)を用いた作物残留試験(1例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(320L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は0.06 ppmであった。

④⑥ いちじく

いちじく(果実)を用いた作物残留試験(1例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(400L/10a)したところ、散布後3~14日の最大残留量は0.27 ppmであった。

いちじく(果実)を用いた作物残留試験(1例)において、16.0%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(200L/10a)したところ、散布後3~14日の最大残留量は0.07 ppmであった。

④⑦ あさつき

あさつき(茎葉)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を6kg/10a、定植時植溝処理土壌混和として1回、株元散布として4回散布したところ、散布後3~14日の最大残留量は0.59, 0.96 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

④⑧ わけぎ

わけぎ(茎葉)を用いた作物残留試験(2例)において、0.5%粒剤を6kg/10a、定植時植溝処理土壌混和として1回、株元散布として4回散布したところ、散布後3~14日の最大残留量は0.13, 0.04 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

なお、これらの試験結果の概要については、別紙1を参照。

注1) 最大残留量：当該農薬の申請の範囲内で最も多量に用い、かつ最終使用から収穫までの期間を最短とした場合の作物残留試験（いわゆる最大使用条件下の作物残留試験）を実施し、それぞれの試験から得られた残留量。

（参考：平成10年8月7日付「残留農薬基準設定における暴露評価の精密化に関する意見具申」）

注2) 経過日数13日の試験については、本来最大使用条件下として定められた14日の試験成績の誤差範囲内とみなし、当該試験成績を暴露評価の対象としている。

注3) だいち（乾燥子実）の圃場Bにおける試験については、定められた適用回数を超えて試験がなされているが、処理直後の降雨による再処理の結果によるものであることから、暴露評価の対象としている。

注4) 夏みかんの果実については各試験区の果肉/果皮重量比を用いて算出している。

7. 乳汁への移行試験結果

乳牛2頭に対し、クロチアニジン 14mg/頭/日を朝の搾乳直後に7日間連続して経口投与した。投与開始日、投与開始後1、3及び7日、最終投与後1、3及び5日に、搾乳機を用いて1日に2回搾乳し、同一日の試料を十分に攪拌し、分析試料としてクロチアニジン含量を測定したところ、いずれの試料においても、残留は検出されなかった。（検出限界 0.01ppm）

8. ADIの評価

食品安全基本法（平成15年法律第48号）第24条第1項第1号の規定に基づき、平成17年10月4日付厚生労働省発食安第1004001号及び同法第24条第2項の規定に基づき、平成18年7月18日付厚生労働省発食安第0718028号により食品安全委員会あて意見を求めたクロチアニジンに係る食品健康影響評価について、以下のとおり評価されている。

無毒性量：9.7 mg/kg 体重/day

（動物種） ラット

（投与方法） 混餌投与

（試験の種類/期間）慢性毒性/発がん性併合試験/2年間

安全係数：100

ADI：0.097 mg/kg 体重/day

9. 諸外国における使用状況

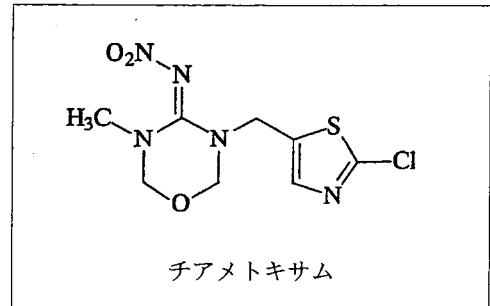
コーデックス、米国、カナダ、欧州連合（EU）、オーストラリア及びニュージーランドについて調査した結果、米国及びカナダで、とうもろこし、なたね、乳等に基準値が設定されている。

10. 基準値案

(1) 残留の規制対象

クロチアニジン

ただし、クロチアニジンは、同じく殺虫剤であり、農薬として登録・使用がなされているチアメトキサム（平成16年8月3日付厚生労働省発食安第0803001号及び平成18年7月18日付厚生労働省発食安第0718002号により、食品安全委員会に意見聴取中）の代謝物でもあり、チアメトキサムの使用によるクロチアニジンの残留が認め



られている。基準値案は、クロチアニジン使用によるクロチアニジンの残留の他、チアメトキサム使用由来のクロチアニジンの残留も含め、設定した。

なお、米国等の基準にあつては、チアメトキサムの基準の対象として、チアメトキサム+チアメトキサム由来のクロチアニジンとしているが、食品衛生法上はチアメトキサムの基準はチアメトキサムのみを対象とすることとし、クロチアニジンの基準値の対象を、クロチアニジンとチアメトキサム由来のクロチアニジンの和とする。

(2) 基準値案

別紙2のとおりである。

注) クロチアニジン使用によるクロチアニジンの作物残留試験成績と、チアメトキサム使用によるクロチアニジンの作物残留試験成績がある場合、双方共に同一作物に使用された場合の最大残留量を考慮して定めた。記載のある作物残留試験成績のうち、右側の欄に示した試験成績（チアメトキサム由来クロチアニジン作物残留試験成績）は、チアメトキサム使用によるクロチアニジンの残留値を示したものである。

(3) 暴露評価

各食品について基準値案の上限まで又は作物残留試験成績等のデータから推定される量のクロチアニジン使用によるクロチアニジン及びチアメトキサム使用によるクロチアニジンが残留していると仮定した場合、国民栄養調査結果に基づき試算される、1日当たり摂取する農薬の量（理論最大摂取量(TMDI)）のADIに対する比は、以下のとおりである。（別紙3）

なお、本暴露評価は、各食品分類において、加工・調理による残留農薬の増減が全くないとの仮定の下におこなった。

	推定摂取量／ADI(%) ^{注)}
国民平均	16.5
幼小児（1～6歳）	31.7
妊婦	14.0
高齢者（65歳以上）	16.7

注) TMDI 試算は、基準値案×摂取量の総和として計算している。

- (4) 本剤については、平成 17 年 11 月 29 日付け厚生労働省告示第 499 号により、食品一般の成分規格 7 に食品に残留する量の限度（暫定基準）が定められているが、今般、残留基準の見直しを行うことに伴い、暫定基準は削除される。
- (5) クロチアニジンの基準値については、本物質がチアメトキサムの代謝物でもあることから、現在食品安全委員会で行っているチアメトキサムの食品健康影響評価の結果を踏まえ、今後必要に応じ見直しの検討を行うものとする。